

平成27年度 本郷中学校
第1回 入学試験問題

国語

(五〇分 満点…一〇〇点)

注 意

- 一、指示があるまで問題冊子を開いてはいけません。
- 二、答えはすべて解答用紙に記入しなさい。
- 三、字数指定のある問題は、特別の指示がない限り、句読点、記号なども字数に含みます。
- 四、用具の貸し借りは禁止します。
- 五、指示があるまで席をはなれてはいけません。
- 六、質問があれば、だまって手をあげて監督者を呼びなさい。
- 七、試験が終わったら、解答用紙だけ提出しなさい。問題は持ち帰ってもかまいません。

【一】 次の①～⑤の——線部について、カタカナの部分は漢字に直し、漢字の部分はその読みを、ひらがなで答えなさい。なお、答えは、ていねいに書くこと。

- ① 塩で味を調える。
- ② つり糸をタ^ラす。
- ③ ケイ^イサツに通報する。
- ④ 兵をヒ^キいて国境へ向かう。
- ⑤ ユウラン船で湖をめぐ^ルる。

(1)

【二】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

昔から人間は「生きることの意味があるのか？」と問うてきました。これに対して、哲学者の中にも文学者の中にも、人生には意味がないと考える人がいます。意味があると考える人もいますけども、意味がないと考える方が、どっちかというと説得力があるというか、多いんですね。1、「人生には意味がある」と主張すると、どんな意味があるのかを説明しなきゃいけなくなつて、それが難しいということもあるかもしれません。

(中略)

人生は無意味だと言うときの「無意味」ということばはあいまいですけど、ここでは簡単に、「価値がない」「生きるに値^{あた}しない」というぐらいの意味に考えておきますね。「参加することに意味がある」と言ったりしますよね。それは、「参加することが重要だ」とか「参加することに価値がある」ということです。「無意味」はその反対で、「価値がない」とか「重要なものではない」ということだとしておきますね。要するに、人生は無意味だと主張することは、人生に「a」な評価をしているということです。

(2)

1 どうして「人生は無意味だ」という主張が出てくるんでしょうか？ ふつうの生活をしているかぎり、生きることに意味があるのかという問題はあまり意識に上りません。とくに、恋愛が順調で、お金もたくさんもっていて、映画とかスポーツとか楽しみがいっぱいあるという、非常に楽しい生活を送っている人が、人生は生きる意味があるのかと言って考え込むことはなさそうですよね。そんな状態になったことはないから、たしかなこととは言えないんですけどね。逆に、たとえば戦争に行つて生きるか死ぬかの危険にさらされているとか、今日の食べ物にも困るような極^{ごく}貧^{ひん}生活を送っているような人が、人生には生きる意味があるのかということを問題にすることもあまりなさそうに思えます。

人生に意味があるかどうかを問題にするのはたいいてい、フラれたとか、仕事がうまくいかないとか、自分の進路にずっと迷い続けているとか、そういうときじゃないかと思うんですね。そしてしばしば人生は無意味だという結論に到達します。それにも

いろんな理由があります。一つの理由はこうです。

われわれがどんなことをしても、何を成し遂げたとしても、結局、いつかは死んでしまい、何もかも無に帰してしまふ。最終的には人類が滅亡するわけですからね。だから、どんなことをしてもいつか終わりが来てしまふ。すべてが消え去ってしまうと気が来る。人生にどんな意味を求めても、最終的には死によってすべてが消え去ってしまうんだしたら、何をしても意味がない。

動物の生態を見てもそうです。テレビで見ると、サケは生まれた川を下って海に出て、大人になると川をさかのぼって卵を産んで、死んでしまいます。そういう一生を送ってるわけですね。そのサケにとって生きるとはどういうことなんでしょうか？卵を産んで子孫を残すことが唯一の生きる意味であるように思えます。そうすると、生きていることの意味は子孫を残すことにあるんでしょうか？でも、子孫を残すことにどんな意味があるんでしょうか？子孫もまたその子孫を残し、ということを繰り返して、種を保存していても、最終的にはサケという種全体が絶滅するときにきます。この地球もいつか絶滅するし、サケが別の星に移住したとしても、宇宙そのものが [2] 消滅するんですよね。よく知らないんですけど。人類も同じ運命をたどるはずですよ。そう考えると、どんなことをやっても意味がないような気になりませんか？

そういう理由で人生とか生きることには意味がないと考える人がいます。でもぼくには、この考え方は間違っているように思えます。

意味のあるなしは、たいていの場合、終わりがあるかないかということとは関係がないように思えます。 [3]、終わりがあつた方がいいような場合もありますからね。音楽にしても映画にしても、いつかは終わります。ふつうの映画は二時間ぐらいで終わりますが、終わりがくるからつまらないとか意味がないと言えるでしょうか。いつまでも終わらなくて永遠に続くような映画なら意味があることになるんでしょうか。

音楽でも同じです。どんな曲も必ず終わります。音楽は終わるから無意味だとは言えません。

(中略)

それどころか、日本人は桜を愛でますけど、これは桜の花がパツと散ってしまうところが評価されていると言われるぐらいです。日本人はこういう「はかない」ものにこそ美を見いだすと指摘する外国の美学者もいます。

だから終わりがあるかどうかということは、意味があるかどうかには関係がないし、 [4]、起承転結があつて、最後のがつまらないかどうかということは、終わりがあるかどうかには関係ないようにぼくには思えるんです。

逆に、人生に終わりがなければ意味が出てくるのでしょうか。たとえばサケが死なないで永久に生き続けたら、それによってサケの一生には意味が出てくるんでしょうか。人間が絶対に死なないようになったら、それによって意味が出てくるんでしょうか。ぼくには終わりが来ないことによって意味が出てくると考える理由が分からない。 [5]、終わりが来ないと、無意味さが計り知れなくなることがあります。

ギリシア神話に、シーシュポスの神話というのがあります。これはシーシュポスという人が神の怒りを買って、神に罰を加えられる話ですけど、どういう罰かというと、大きい岩を山の頂上にまで押し上げるといふ罰なんです。でも山頂に岩を運ぶと、頂上は尖っている^{とが}ので、岩はまた下に落ちてしまふ。落ちた岩をまた頂上に押し上げ、押し上げるとまた落ちる、落ちては押し上げる、それを永遠に繰り返さなきゃいけないという罰を受けるんです。

これは耐え難い^{がた}ことです。なぜ耐え難いかというと、岩を押し上げ続けることに何の意味も見いだせないからです。岩を押し上げれば落ちるといふことが分かっているながら、押し上げ続けるんだからね。しかもそれを永遠に繰り返さなきゃいけないんです。終わりがありません。カミュは『シーシュポスの神話』の中で、人生も同じようなものだと言っています。

この話のように、意味のないことを永久に続けても、無意味さが「b」に増すだけだと言える場合があります。だから、永遠に続けば意味が出てくるとは考えられせん。

こういう例はいくらでも考えることができます。たとえば、神様がみなさんに、毎日、海岸に行つて洗面器に一杯砂をすくつ

でしょうね。何らかの原因でつまらないと思っている人が、人生は無意味だと思ひやすいんだと思います。

「つまらない」と感じるのは、「人生は無意味だ」という考えの心理的動機ではあるんですけど、強力な動機です。「考えてみると毎日こんなにつまらないだろう、だから無意味なんだ」と言う人は、毎日がつまらないという「心理的理由」によって、人生は生きるに値しない、意味がないと考えているんだと思います。でも、つまらない側面だけを取り出して、「ほらこんなにつまらない。ゆえにつまらない」と考えるのは、⁵論証でも何でもありません。たんなる感想です。しかも偏った感想だと思います。

(土屋賢二「あたらしい哲学入門」)

問一

1 6 には、A「むしろ」・B「たぶん」のどちらかが入ります。当てはまる組み合わせとして最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア	1 ≡ A	2 ≡ A	3 ≡ B	4 ≡ A	5 ≡ A	6 ≡ A
イ	1 ≡ A	2 ≡ B	3 ≡ A	4 ≡ B	5 ≡ B	6 ≡ B
ウ	1 ≡ B	2 ≡ A	3 ≡ B	4 ≡ A	5 ≡ B	6 ≡ A
エ	1 ≡ B	2 ≡ B	3 ≡ A	4 ≡ A	5 ≡ A	6 ≡ A

問二

「a」・「c」に入る言葉を次のア～オの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号は二度使えないこととします。

ア 自主的	イ 絶望的	ウ 否定的	エ 客観的	オ 基本的
-------	-------	-------	-------	-------

問三

【Ⅰ】・【Ⅱ】に当てはまる言葉として最も適当なものをそれぞれの語群から一つずつ選び、記号で答えなさい。

【Ⅰ】ア 土壇場 ^{どたんば}	イ 大団円 ^{だいたんえん}	ウ 正念場 ^{しょうねんば}	エ 大往生 ^{だいおうじょう}
【Ⅱ】ア 愛着 ^{あいちゃく}	イ 趣味 ^{しゅみ}	ウ 感慨 ^{かんがい}	エ 造詣 ^{ぞうけい}

問四

——線1「どうして「人生は無意味だ」という主張が出てくるんでしょうか？」とありますが、筆者はこのような主張が出てくるのはなぜだと言っていますか。次の□に当てはまる形で二点にまとめ、それぞれ十～十五字で記しなさい。

1「人生は無意味だ」と言う人は□

と考えているから。

2「人生は無意味だ」と言う人は□

と考えているから。

問五

——線2「日本人はこういう「はかない」ものにこそ美を見いだす」とありますが、ここで述べられている「日本人」を説明したものとして最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 日本人は、どんな時にも、強いものより弱いものの味方をするのが大切だと考える。

イ 日本人は、長く生きることにはこだわらず、いさぎよく死ぬことが良いことだと考える。

ウ 日本人は、たとえ短い命であっても、その生の中に積極的な意味を認めようとする。

エ 日本人は、それぞれの季節ごとに存在する、様々な美しいものを見つけ出そうとする。

問六

——線3「ギリシア神話に」というのがありますが、ここで筆者が「シーシュポスの神話」を紹介しているのはどういうことを言いたいからですか。最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人生は何ごとにおいても、ずっと終わらないから意味が生まれてくるというわけではないのだということ。

イ 人の生活もこの神話と同じように無意味なことが多く、人生はその繰り返しにすぎないのだということ。

ウ 人の一生には、この神話とちがつて意味のあることがたくさんあり、人生には大きな意味があるのだということ。

エ 神の世界ですら無意味な行為があるのだから、人間の行為はなおさら無意味なものばかりだということ。

問七

——線4「よく見れば わずな花咲く 垣根かな」とありますが、この俳句を詠んだ芭蕉の気持ちを、筆者はどのようにとらえていますか。最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 垣根に咲く花を見て、どんな場所でも生きることのできる生物の強さに驚いている。

イ よく見なければ見つからないようにひっそりと咲く花の弱々しさを哀れんでいる。

ウ 目立たぬようにひっそりと生きている花の姿に自分の生き方を重ねて共感している。

エ 何気ない日常生活の中で花を見つけたというささやかなできごとを感じ入っている。

問八

——線5「論証でも何でもありません。～と思います」とありますが、筆者の言う「論証でも何でもありません」とはどういうことですか。五十文字以上六十文字以内で記しなさい。

【三】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

運動部が練習をしている時間は、玄関から校門までの距離が長い。¹グラウンドの野球部が使っているスペースのすぐ横を通らなくてはならない。オレも一年生の半年間だけ地面ならしとボール拾いをしていた場所だけど、今はここを通るたびに少し勇気がいる。腹が痛くなりそうだ。

まっすぐ前を向いたまま、大股で歩いた。もうすぐ A だというのに、校庭の乾いた土が寒々と舞い上がる。どうせなら、忍術みたいにオレの姿が土埃で隠せたらいいのに。

後頭部の辺りにむけて、紙屑でも投げたような声が飛んできた。練習の声出して叫んでいる声にまじって聞こえる。「線香くせー」

何度も聞いた言葉なので、はつきりと聞き取れる。誰が言っているのかは知らないが、退部する前から言われていた。オレの姿を見るとその言葉を吐きかけるといのが、野球部の裏規則にでもなっているのだ。無視をして歩いた。オレは線香くさくなんかない。

家に帰ると、籠に入った白い花と果物が届いていて仏壇の脇に飾ってあった。壁のカレンダーを見ると二十四日に印がしてある。そう言えば、今日は姉の命日だった。毎年お祖母ちゃんと叔母さんがこうして届けものをしてくれる。

(中略)

台所で夕飯の準備をしている母親が見える。今日も姉の茶碗を食卓に並べる。

「母さん、こんどさ、うちで友だちと勉強していい？」

「うん。いいわよ」

うまく夏見を誘えたら、オレの部屋で稽古ができるかもしれない。漫才の稽古するのは母親には内緒だ。芸人になることは、

ぎりぎりまで両親には言わないつもりだ。わかってもらえるわけがない。

「いつ来るの？ お友だち」

「まだ、わかんないけど……」

この家に夏見を呼んだらやっぱり「線香くさい」と思うだろうか。確かに姉の仏壇に毎日線香はあがっているけれど、うちはそれだけじゃなく、ほかに臭うと言われる要素があるのだ。父親のほうにも……。でも夏見はそんなことを気にするような人間じゃない。だから相方に選んだんだ。

仕事が忙しかったらしく、父親は夕飯の時間をかなり過ぎてから、寒そうに背中をまるめて帰ってきた。いつもスーツにビジネス鞆を持って、ぴかぴかに磨いた革靴で通勤している。髪型だって耳を出して、整髪剤できっちりまとめている。

ソファアの上から鼻を突き出して、父親の歩いたあたりを嗅いでみるが、冷えた空気が動いているだけで、なんの臭いもしない。火葬場で働いているからといって、線香の臭いがするなどと、誰が言いはじめたのだろう。お寺と違って色んな宗派が集まるのだから、皆がみな線香やお香を焚くわけじゃないだろうに。

上下そろいのスエットに着替え、テレビの前のテーブルで缶酎ハイを飲みながら夕飯を食べる姿は、たぶんどこの家にもいる父親だ。酔っ払ってオレに話しかけてくることもある。休みの日は一日中車を磨いたり掃除したりしている。家電のパンフレットを見るのも好きだ。

(中略)

親には言えないが、中学生になってからもいろいろ言われたのだ。クラスではお調子者として扱われていても、陰口はちゃんと聞こえていた。オレがどこかでびくびくしていたからだろうけど、たったひと言でも何日も気になった。

野球部だって、「線香くさい」という誰かのふざけた陰口がいやで、半年でやめてしまった。びくびくしているのは、今だって変わらない。それもきつと、本心では父親の仕事を誇りに思っていないせいだ。

赤らんだ顔でテレビを観ている父親はやけに満足気に見える。人生の悩みなんかはとっくに乗り越えて、このまま定年まで迷

いなく働いていくのだろう。

あの時、自分の仕事のことを、こうも言っていた。

「いろんなひとを、あの世に見送ってるとな、やっぱり誰かのために尽くした、世の中のために役に立ったようなひとが、天国に行くんだって、わかるようになったんだ」

「父さんはイタコか」^{注2}と今だったらツツコみを入れている。だけど、それがいつまでも胸につかえている。

「世の中のために役に立ったようなひとが、天国に行く」と、その言葉が。

火葬場の仕事は、確かに誰かのため、世の中のために役に立つ。だから、父親はきっと天国に行ける。自分でもそれがわかっているから、あんな赤らんだ満足気な顔をしているのだ。きっとそうだ。

母親だって天国に行く。我が子を亡くして、あんなに辛い思いをしているし、子どもを失ったひとたちと、ボランティア活動もしている。地獄に落ちるわけがない。

地獄に行くとしたら、この家ではオレだけ。役にも立っていないし、誰のためにも尽くしていない。これから進学して就職して、頑張って働けば世の中の役に立てるかもしれない。でもなんだかオレの場合、天国のゴールがずっとずっと遠い気がする。スタートラインがみんなより後ろにあるから、よけい頑張らないと、天国に行けないような……。半人前というか、存在感がないというか、足りない部分が多すぎるから。

だからオレには、みんなを幸せにできるお笑い芸人になることしか、天国に行く方法はないんだ。

「三者面談があるんだろ。志望高校を訊かれたりするの？」

壁かけカレンダーに書き込んである予定を見ながら、思い出したように父親が口を開く。オレに言っているのだろうか。

「そうね。あと、一年しかないから公立か私立かくらいは希望を訊かれるんじゃない」

母親が答えた。オレのことは見えていないのか、視線がこちらを向かない。

「まあ、成績しだいだからな。どっちでもいいって、本人の行きたい所にしますって答えておけばいいだろう」

「そうね。そうする」

あっさり話題は終了した。オレは発言していないけど……。まあ、特に自分の意見もないからそれでいい。こっちはとにかく、最終的にお笑い芸人になればいいのだ。こんなオレでも一発逆転できる仕事をするんだ。

「夏見、おまえの絵、面白いな。なに描いてるんだ？」

美術の時間はたいくつで、夏見のようすを探りに近くに来た。自分の絵はなかなか完成しない。日本画なんて初めて描くので知らなかったが、下描きの線を墨でなぞって縁どりして、その上に色を塗るのだそうだ。

「え？ あれ、描いてるんだけど」

夏見はグループの真ん中の机に置いてある、花瓶と紫色の花を指さした。

「どこに花がある？ 花瓶がある？」

和紙に墨で描いているのは、花瓶でも花でもない。その下に敷いてある水色の生地のひとつ部分だ。布地の光があたっていると、ところと陰になっているところ。シワがたくさんあるので幾何学模様きかがくのようになっている。

「うん……そうか。シワを描いてるのか。面白いな」

やっぱり夏見は感性がちがう。思いも寄らない発想をする。

「じゃあ、あれか？ シワ加工の服とか好きか？ アイロンかけ忘れたみたい」

「え？ 別に好きじゃないけど。僕、難しい絵が描けないから。簡単な部分を描くの」

「んなわけないだろ？ ウケを狙ねらってんだろ。ホントはおまえ絵だって上手うまいんだろ。だけど、ひとと違うことしちゃう性格なんだろ」

「そんな……」

また泣きそうな目をしてオレをにらむ。どこまで本気なのか、たまにわからなくなるが、マジになっているように見せておい

て、そのあとで爆笑させるようなことを言うのだ。そこが夏見のすごいところだ。

「山上君」

顔が赤くなってきたので、マジで反撃されそうだ。

「なんだ？」

「やめてよ。もう、さ、ぼ、ほにと、そなつ、だつと」

何を言おうとしているのか、真っ赤になってわけのわからない音声を発している。

「おまえは宇宙人か」

たまたま教室内が静まっていたので、夏見の声もオレのツツコみも大きく響いた。一瞬、間をおいて、どつと笑い声があがった。今のかけ合いは、芸としては抜群のできだった。

「こらーっ、山上。うろろろするな。自分の席に座りなさい」

美術教師には怒られたが悔しくはない。むしろ勝ち誇った気分だ。みんなを笑わせることは、ものすごく嬉しいことだ。たいくつで息苦しかった教室が、一瞬にしてさわやかで明るい空気になるんだ。

「な、ウケたろ」

自分の席に戻りながら夏見に B をしたが、口をへの字に結んでうつむいてしまった。本当はまんざらでもないはずだ。笑わせることは悦びなんだから。

やっぱり夏見はオレの足りない部分をいつも補ってくれる。体が半分になっているようなときに、ちゃんと半分を埋めてくれるんだ。夏見といれば、寂しさなんか感じないでいられる。

その日の帰り、夏見をつかまえて決着をつけようと授業中から計画を練っていた。二月は短いから、ぼやぼやしているうちに三年生を送る会は一週間後にせまっている。漫才の稽古を始めるにはぎりぎりの日数だ。

「おまえの台詞は少ないんだぞ。ボケの言葉を言ってくれば、他はオレが喋るから。オレは自分で書いた台詞だからもう頭に

入ってるんだ。だから、何回か合わせればできるはずなんだ」

降りたそうに出口の方を見ながら頭をかいている夏見を、下駄箱の前で説得している。

「おまえは自分じゃあ気がつかないかもしれないけどさ、喜劇人の血が流れてるよ。神様から使命をうけているんだ。ひとを笑わせるために生まれてきたんだよ。わかるか？」

「そんなことないって」

褒めるつもりで言ったのに、あきれたように首を横にふる。なぜ、素直に嬉しがないのか、かっこつけているつもりなのか、いいかげんイラついてくる。下駄箱の横の壁を思いっきり蹴った。どんと低い音がしてカカトの骨が折れたかと思うほど痛くなった。

「イテテ」

「だ、だいじょうぶ？」

痛みで怒りのスイッチが入って、言葉を抑えられなくなった。

「ホントはおまえさ、夏見。自分はすごいんだって、心の中で思ってたんだ。自信がないふりしちゃってさ、ホントはオレのこと、ばかにしてんだろ」

「違うよ。ぜんぜん違う」

「なにが違うんだよ」

「僕、ばかだからさ」

「知ってるよ、そんなの。ばか」

語気が強くなった。夏見は目を真っ赤にさせ、靴をはき替えると駆け足で出ていった。

「ばか」というのは、そういう意味ではない。芸人は「ばか」のほうがウケる。芸人に「ばかだねえ」というのは褒め言葉なのだ、ベテラン漫才師がテレビで言っていた。それを伝えたかったのだが、傷つけてしまったのだろうか。

家に帰ってから夕飯もあまり食べられず、部屋にこもっていた。勉強するふりをせずと考えた。夏見とのコンビをあきらめることを想像すると蛍光灯が切れたみたいに、ますます部屋が暗く見えた。

九時過ぎになって家に電話が来た。母親が取り次いで、「夏見君」と口にしたので驚いた。電話なんて初めてだ。もしもしとしか言えないでいると、夏見が話してくれた。

「さっきはごめんね」

オレが言うべき言葉が先に聞こえてきて、あせって答えた。

「オレも、ばかって言ってごめん」

「あの、僕、三年生を送る会でさ、ちょっとだけやってみるよ」

「なにを？」

「だから、山上君と、しゃべるやつ」

「漫才か？」

「そう、それ」

「そうか。じゃあやろうな。いっしょにやろうな」

夏見がやる気になった。その場で飛び上がりそうになった。

明日から、オレの部屋で稽古する約束をして電話を切った。母親にはいっしょに勉強するからと伝えて、おやつは自分で買ってくることにした。

いざ、願いが叶^{かな}つてみると興奮して、何から準備をしないのかわからない。立つて喋^{しゃべ}るだけだから、準備はいらないはずだ。でも、ふたりの立ち位置はカーテンの前か、それとも押入れの前くらいは決めておいたほうがいい。

スタンドマイクの代わりになる棒はないだろうか。納戸^{なんど}からフローリング用の柄^えの長いモップを持ってきた。これをガムテープで固定してマイクにしよう。

C

なんて言われるオレの家が、急に明るくなったような気がした。

（神田茜『ぼくの守る星』）

注1 缶酎ハイ……缶入りのお酒。

注2 イタコ……主に東北地方にいる、霊界との交流ができたり死者の霊を呼びもどしたりできると言われている人。

特に恐山^{おそやま}（青森県）のイタコが有名。

問一 A に入る季節として、最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 春 イ 夏 ウ 秋 エ 冬

問二 線「紙屑でも投げたような声が飛んできた」とありますが、この部分にある「ような」と同じ働きで使われているものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア そこに誰かが立っているような気がする。
 イ 山の稜線は、のこぎりのような形をしている。
 ウ 彼は、そんなことを気にするような人ではない。
 エ 私は、以前この絵を見たような気がする。

問三 B に入る言葉として、最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 目こぼし イ 目くぼせ ウ 目通し エ 目くぼり

問四 線1「玄関から校門までの距離が長い」とありますが、「オレ」がこのように感じるのはなぜですか。最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア かつては仲良く地面ならしやボール拾いをした仲間が、目の前で野球をしている姿を見てうらやましく感じるから。
 イ チームワークを大切にしていた野球部を辞めたことで、仲間との関係を壊してしまったことに引け目を感じるから。
 ウ 自分が半年間だけ所属していた野球部が活動しているところを通ると、いつものように野球部員にからかわれると思いつらくなるから。
 エ 放課後、野球部員が活動しているのを見ると、ボール拾いばかりさせられた昔のことを思い出しせつなくなるから。

問五 線2「それがいつまでも胸につかえている」とありますが、この時の「オレ」の気持ちについて、五十字以上六十字以内で具体的に説明しなさい。

問六

——線3「まんざらでもないはずだ」とありますが、この時、「オレ」は夏見の思いをどのようなものとしてとらえていますか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 夏見は「オレ」に親近感を持ち、笑いを通して「オレ」の寂しさを十分に紛らわすことができている。

イ 夏見自身の声と「オレ」のツッコみが、とてもうまく合い合っていると思っている。

ウ 夏見は一見不満そうな表情はしているが、心の中ではみんなを笑わせるのも悪くはないと思っている。

エ 夏見が一見嫌そうな表情はしているが、本当は「オレ」とふざけ合うことを楽しいと思っている。

問七

——線4「語気が強くなった」とありますが、この時の「オレ」の気持ちを説明したものとして、最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 夏見が「オレ」の言葉を否定するばかりで、話を無視し続けることに對して、怒りと反発を感じている。

イ 夏見が「ばか」の意味を理解してくれないことに對して、あわれみと悲しみを感じている。

ウ 夏見が自分はずいといと心の中で勝手に思い込んでいることに對して怒りと憎しみを感じている。

エ 夏見が「オレ」にはないものを持っていることにひきつけられ、それに気づかない夏見に對していらだちを感じている。

問八

C

に入る適当な言葉を問題文中より五字で抜き出し、答えなさい。

問九

問題文中で描かれている夏見の説明として、最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 姉を亡くし、野球部員から嫌がらせを受けた「オレ」を氣遣い、無理やり漫才の練習に誘ってきた「オレ」の願いをこころよく受け入れる優しさを持っている。

イ クラスではお調子者として扱われているが、恥ずかしがりやで親には言えないような秘密を持っており、いつもびくびくしている。

ウ 自分のことを誤解している「オレ」に戸惑い、漫才の練習をすることに抵抗を感じているが、それでも「オレ」との関係大切にしようとしている。

エ 悩みの多い「オレ」の日常生活や進路を心配し、口げんかをしてすぐに謝る優しさを持っている。

国語解答用紙

【二】

10

②×5

①

②

③

④

⑤

【二】

4

④×1

問一

9

③×3

問二

a

b

c

6

③×2

問三

I

II

6

③×2

問四

2

1

12

④×3

問五

問六

問七

8

⑧×1

問八

50

60

【三】

9

③×3

問一

問二

問三

5

⑤×1

問四

9

⑨×1

問五

50

60

12

⑥×2

問六

問七

5

⑤×1

問八

5

⑤×1

問九

【二】

10

【三】

45

【三】

45

総点

100

受験番号

氏名